
遙かの歌声

月城 柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かの歌声

【Nコード】

N2034A

【作者名】

月城 柚

【あらすじ】

音が響く――。僕・一ノ瀬理吾は転校初日に学校をサボった。音が響いて気持ちが悪かったから。屋上に訪れた少女と出会って、僕は、変わっていく。

不協和音（前書き）

初めてのレンアイショウセツという物です。……ハズいっすね、これ（；、、（、ゝ
何はともあれ、初ジャンル、頑張って書いてみます。

不協和音

音が響く。

音が響く。

音が響く。

外の音が。

僕に響く。

うるさい。

黙ってろ。

音が響く。

音が響く。

音が、響く――。

黙れよ。

うるさいんだよ。

消えてくれ。

吐き気がする。

汚い雑音を、

僕に押し付けるな。

やめてくれ。

こ
ん
な、

醜い世界を晒け出すのは――。

焦燥（１）

転校初日というのは、慣れない。

僕は廊下で待たされ、これから担任となる先生は、僕の新たな学び所となる教室へ入って行った。

「聞けえい皆の衆。今日は急な転入生を紹介してやろう！」

うおおおお！！

中から、とんでもない雄叫びが轟く。

そんなマンガみたいな事を平気でやるクラスメイト達と、僕は共に過ごすのか……？

「ちなみに男だ」

シィ……………ン。

静けさを取り戻す教室。

（…………悪かったな、男で）

ここまで極端だと怒る気も起きない。

僕がため息を吐くと、教室の引き戸が開き女の先生が顔をヒョコリと覗かせた。

強気そうな切れ長の双眸。

鼻立ちは良く、口元は凜と引き締まっている。

化粧っ気はまったくなく、しかしそれでも綺麗と呼べる先生だ。

色気は皆無で、男女共に人気がありそうな印象を受ける。スーツの上に白衣を着ている。

「入って来な。紹介するからさ」

促されるままに、僕は教室に入った。

キャアキャア！と女生徒が甲高い声を挙げ、僕は思わず顔をしかめた。

「はいどーぞ」

「…………一ノ瀬 理吾（あつ）です。これから、よろしく願います」

簡単に自己紹介を済まし、僕は適当に頭を下げる。また女生徒らが

甲高く騒ぐ。

うるさい。

「ほら、静かにしろ」

先生の一喝でクラスはシンと静まる。余程の人望がないとなせないだろう。

「あたしはこのクラスを担任してる風^{なぎ} 結城^{ゆづき}。ちなみに古典教師。この白衣を着ている理由は格好いいから。何か質問はあるかい？」

「いえ、ありません……」

僕は首を振る。破天荒そうな女教師・風は『そうか』と呟く。

「良かったな一ノ瀬。窓際の最後尾が君の席だ」

見ると、そこには誰も座っていない。

僕はまだ新調していない鞆を肩に担ぎ、その席まで歩む。

「あ……」

と、床にシャーペンが落ちている事に気付き、僕は屈んでそれを拾

う。

「落とし物……」

可愛らしくデフォルメされた、シロクマやらペンギンやらアザラシがプリントされたブルーのシャーペン。明らかに男子の持ち物ではないだろう。

「えっと……君の？」

急に立ち止まった事により、周囲からの奇異の視線が強くなり、居たたまれなくなった僕は誤魔化す為にすぐ隣の女子にシャーペンを差し出した。

艶やかな長い黒髪は腰まであり、そそ漆黒の瞳に光の灯ってない、少女。

その女子はゆっくりと顔を上げ、僕を見つめ、シャーペンを見つめ、
呟く。

「……ありがとう」

シャーペンを受け取った女子は再び僕から視線を逸らし、俯いた。
と思ったら、本を読んでいた。

「ナンパが終わったら席に着けえ、一ノ瀬。こっちゃ時間押してんだからよ」

ドッ、と教室中に笑い声が湧き上がり、僕は俯く。

「す、すいません……」

視線から逃げる様に、僕はそそくさと一番後ろの席に座る。

「ンじゃ、HRはこれにて終了。一限目の準備をしろい野郎共」

「私達女の子でっす」

風言葉にクラスの女生徒が軽口を返す。途端に盛り上がる教室。

あ。

また、
だ。

うるさい雑音。

気分が悪い。

やめろ。

やめろ。

騒ぐな。

吐き気がする。

僕に、

そんな汚い音を押し付けるな。

うるさいんだよ。

僕はこの洪水から逃げる様に、重い足を引きずって教室を後にした。
一瞬だけ教室を振り返ってみると、
長い黒髪の女生徒の姿はなかった。

適当に校舎を歩き回り、上へ昇っていく。

ケータイで時刻を確認してみると、すでに一限目が始まっている。まさか転校した日にサボるとは、自分でも驚いた。

だけど……ダメなんだ、五月蠅いのは。どうしても気分が悪くなる。最上階の階段を昇ると、頑丈そうな扉があった。

ゴツい南京錠は外されていて、鍵は開いている様だ。

ギギギギギギ……。

重厚な扉を開け、屋上へと足を踏み出す。

初秋とは言え、陽の照りつける屋上は少し暑い。

フエンスに腰掛け、制服のポケットに仕舞っていたMDを取り出し、イヤホンを耳に装着する。

雑音はこれで聞こえない。整った旋律だけが僕の心を癒してくれる。チャイコフスキーの交響曲第6番口短調『悲愴』(Pathétique)。

落ち着く。冷たい水に身体を沈めた様に、静かで、綺麗な旋律の音。クラシックが好きな僕は、特にこの曲が好きだった。

痛みも気持ち悪さも悲しみも苦しみも消してくれる、この曲が。

静かな空間に、僕一人。

僕が幸福に浸っていると、不意に屋上の扉が開かれた。

（やべっ、サボってるのがバレた！？）

急いで立ち上がる。

屋上の扉が閉じられた時、そこには一人の少女が佇んでいた。
シャーペンの持ち主の少女。

漆黒の双眸は僕を見つめ、口が微かに動く。

何か言った様だが、イヤホンを通じて聞こえる音楽で聞こえない。

僕はイヤホンを外し、訊ねる。

「ごめんっ。何だって？」

「……そこ」

視線は完全に僕に向いているのだが、今度は僕の足下を指さしながら
呟く。

いや、この場合は僕が立っている場所か。

「あ、ここ？どけって？」

コクン、と震える様に頷く少女。

（……もしかしたら、ここは彼女の特等席なのかも知れないな。

そりゃ自分のお気に入りの場所に他人がいたらイヤだろう）

イヤホンを再び耳に装着し、僕はその場所から五メートル離れて座
る。

少女はフェンスに手をかけて立ったまま、ぼーっと景色を見下ろし
ていた。

何をするでもなく、僕は屋上にいた。何度もチャイムが鳴っても、
ずっと。

長い黒髪の少女は立ったまま景色を眺め、僕はフェンスを背もたれ
に座り音楽を聴く。

特に何をする訳でもない――。

焦燥（2）

今は何限目だろうか。そろそろ空腹が強くなってきた。

「……なあ、アンタ。学食ってどこ？」

音楽を止め、僕は五メートル隣で直立不動している少女に尋ねる。

「……本校舎の一階の端。ここから見える……あそこ」

少女が指さす先を見ている。

この高校の校舎はLHという形をしていて、上の方に校門がある。

五年前に新設したL字をしている新校舎とH字をしている旧校舎という構成らしく、一年と二年は旧校舎を使用していて、三年は受験勉強の為に新校舎に隔離していると風から簡単に説明してもらった少女が指した先は、新校舎のLの短い部分に当たる箇所だ。

「一つ質問なんだが、あそこが学食だとしたら新校舎だろ。あの新校舎が作られる前はどうしてたんだ？」

「……六年前は、学食はなかったって……話を聞いた」

「ウゲっ、マジかよ。学食ない高校なんてあんのかよ……」

これはこれで、ある意味で驚愕の事実だ。

僕は立ち上がり、尻に付いた埃を適当に叩き屋上を後にした。

「ホラ」

買ってきたパンの中から焼そばパンとあんパンとパックの牛乳を少女に渡す。

不可思議と言わんばかりに少女が首を捻る。

「何か食つとかないと身体壊すぞ」

僕はさつきと同じ場所に座り、カツサンドを取り出す。

幸いにもまだ四限目の途中で、人は全くいなかった。

購買のオバチャン連中もいなかったから、パンを拝借してその分のお金を置いてきた。

盗んだ訳ではない。かなり強引だが、一応合法だ。

「あの……」

少女が呟く。風向きがいいお陰で、さつきよりは聞こえやすい。

「ん？あ、弁当派だったりすんのか？」

「いえ……そうじゃなく、て……お金を……」

「あ、貰ってなかったなそう言えば。えっと……確か三二〇円だ」

少女はスカートのポケットから財布を取り出し、小銭入れから三二〇円を探す。

「……ない」

なかったらしい。

「……先に言つとくが、六八〇円なんて中途半端な額はないぞ」

今まさにお札を取り出そうとしていた少女の手が止まる。

しかもよく見てみると、〇が一つ多い。九六八〇円なんて尚更ない。

「……どうしましょう」

イントネーションに疑問符がついている様には聞こえない少女の声。

「いいよ、奢るよ」

カツサンドを噛み千切り、咀嚼しながら答える。

「いいから気にせずにご食べ。貸しだとか言わないから」

僕がそう言つと、少女は膝をつき三指をつき、深く土下座をした。

「この御恩は生涯、忘れません……」

「……. っただけオーバーなんだアンタ？」

しばらく土下座した状態で硬直していた少女は普通に座り直し、焼そばパンの包みを開け、小さく食いつく。

引っ張り、ズルズルと焼そば部分が抜け出てくる。

「……モクモク」

その全てを口に含んだ少女は、何とか咀嚼を繰り返す。

「……焼そばが殆どなくなったぞ。一口で」

五メートル先に座るの少女の手元には『焼そばソースが付着した背割れコッペパン』が残っていた。

昼食も終了し、僕は全く話さなくなった。

少女は景色を眺め、

僕は音楽を聴く。

元々、僕は話す為にここに来た訳ではない。

今はそれぞれの目的に戻った、ただそれだけだ。

やがて、陽が下り始め、空気が色が変わっていく。

下が騒がしい。見下ろしてみると、鞆を持った生徒達が続々と帰宅を始めていた。

（放課後、か……）

結局。転入初日を全てサボった事になる。流石にマズいかも……とも思われたが、今更気にする事もない。

僕は腰を上げ、少女の後ろを通り、屋上の錆び付いた扉を開く。去り際、少女を振り返ると相変わらず、呆けた様子で下を眺めている。

昼間は暖かいというかやけに暑かった屋上だが、夕方は少し肌寒い。だが少女は気にした様子もない。

僕は一瞥しただけで、何も言わずに屋上を後にした。

これは少し計算外な結果だ。教室がどこだか分からない。

よくよく考えてみると、意識混濁した状態で歩いていたのだから、当然と言えば当然かも知れない。

特にこの学校はやたらと複雑な構造になっているので、尚更だ。

「……あれ？マジでここ何処だ？」

見た事がある景色なのかそうじゃないのかまるで分からない。

まさか高二になってまで迷子になるとは思ってなかった。

風に会いませんようにと祈りながら、僕が校舎を歩いていると、

「アンプなしじゃベースつまらんで」

「しゃあないやろ。見いや、テルかて練習用ドラムで頑張っとるんや。文句言わんと手え動かししいや」

声が聞こえてきた。

それと同時に、叩きつける様な弦の音。不満に満ちたベース音が、僕の耳を震わす。

気持ちが悪い。

頭痛さえしてくる。

騒がしい訳ではない、むしろ放課後の静寂にこんな気分になったのは初めてだ。だけど、どうして……？

「って兄貴。どこ行こうとしてん！？」

「便所や便所。すぐ戻たるから待っときや」

近くの教室の引き戸が開き、中から茶髪のウルフヘッドの男が出てきた。

口にピックをくわえた男は鼻歌を口ずさみながら、僕の脇を通り過ぎていく。

その雑な旋律が僕の心を益々かき乱す。吐き気が一層高まる。

「ん？どないしました、お兄さん？」

男を見送る少女は、僕を見て小首を傾げる。

「うつわ、顔色わるう！真っ青やん！ちよ、カガミン！ちよつと来てえや！緊急事態発生、緊急事態発生！」

背中をさすりながら、少女は関西弁（なのか？）で叫ぶ。

耳元で喚かれる事により、更に僕の吐き気が増す。

「なあに、モモちゃん。そんな大声出して」

「どうかしたのか？」

少女が出てきた教室から、また誰か出てきた。メガネの少女と大男である。

「このお兄さん今にも死にそうやわ！助けたってや！」

「……勝手に、殺すな」

こみ上げる吐き気を鎮め、僕は少女の腕を振り払う。

MDの音楽を再生し、イヤホンを耳にあてがえばいつもの精神安定剤トランキライザが出来上がりだ。

「大丈夫ですか？」

メガネの少女が呟く。不思議と気分が落ち着いてくる。

僕は三人の間をすり抜け、一言も言葉を発しないまま、その場を後にした。

なんとか教室に辿り着き、鞆を発見して事なき事を得た僕は、自宅であるマンションに帰ってきていた。

一昨日越してきたばかりで家財の殆どが段ボールに納められたままの、何もない部屋。

ベッドと机とテーブルが置いてあるだけだ。

僕は制服のまま、ベッドに倒れ込む。

田舎に越しただけあり、車の音はしない。完璧な静寂が心地よい。ポケットに入れっぱなしだった、ケータイの着メロが静寂を破壊し、僕はケータイを取り出して通話ボタンを押す。

『やあ、理吾。転校初日、どうだった？』

聞こえてくる穏やかな声は、一つ上の兄・詩吾シアのものだ。

「詩吾か。別に。いつも通りだったよ」

『いつも通りって事は、気分が悪くなっただって事か？』

「……いつも通りだよ」

心配げな詩吾の言葉は、いつも僕に嫌悪感を与える。話せば話す程、鬱ふさになる。

『……都会こうちに戻るつもりはないのか？』

一拍置いて、詩吾が切り出してきた。

田舎こうちでの状況なんて初めからどうでもよくて、本当はこれが聞きたかったのだろう。

『父さんも母さんも、お前が知らない土地で一人暮らしをする事を心配してる。今すぐとは言わないが、せめて高校を卒業した時、都こ会の大学に來ると知れば、あの人達も心配せずに――』

「戻るつもりは更々ないよ、詩吾」

僕は詩吾の言葉を遮り、切り返す。

「もう一度言う。戻るつもりはない。僕は田舎こに死ぬまでいる。絶対に都会そうちには帰らない」

『理吾！』

「大声出すなよ、詩吾。耳に響く。……大体、あの両親が僕の心配？ バッカじゃねえの？ 原因不明で具合を悪くする、手の掛かる子供

の心配をする筈がないだろ。……ダメなんだよ、都会^{そっち}じゃ。都会^{そっち}には音が洪水みたいに溢れてて、吐きそうになる」

『だから、その病気を解明する為にも進んだ医学は必要だ。田舎^{そっち}じゃ、持病は一生治らないかも知れないじゃないか』

「詩吾。やっぱ僕は、アンタが嫌いだ」

通話を切り、ケータイの電源を落として放り投げる。
再びの静寂。

この世に音なんかいらない。全てが無音であれば、僕がこんなに苦しむ事はない。

詩吾は持病と言ったが、僕のこれはそんな物じゃない。そんな物じゃない筈だ。

「……苛々する」

心底から僕の心配をしているんだと分かる、詩吾の声。

それが非道く苛々する。喉をかきむしりたくなる様な嫌悪感。

今年大学を受験する優秀な兄と、原因不明で手の掛かる弟。

親がどちらを気にかけているか、子供心ながらに分かる。

分かるから尚、苛々する。

交流（１）

通路路。見知らぬ制服を着ていると、注目を浴びる。

新しい制服は、まだ届いていない。

少なくとも後一週間は都会むこうの学校の制服でいなくてはいけない。別に注目されるのが嫌な訳ではない。

街に出掛けては、音に当てられて道ばたでうずくまる事もあった僕は、もうすでに奇異の目で見られる事に慣れている。

問題は、話題のネタを作っている事によって喧噪が増す事だ。

大勢の声が一斉に、僕を撃つ。気持ちが悪い。

それでも、やはり田舎いなかに來た事は正解だったかも知れない。

人が少なく車が少ない分、一定以上に騒さわがしくなる事はないから。これが都会むこうだったなら既に嘔吐おうとしているだろう。

このくらいなら、我慢も立つ。

僕がそう思っていると、背後から凄まじく甲高い声が聞こえてきた。「せやからな。やっぱウチとしてはチョッパチョッパとしてベースやりたいんやって！ピックより指の方が心に響くんや！」

聞き覚えがある。この声は、昨日の少女の声だ。

「ってかお前、マジでベースやるつもりか？ベースはかなり力があるんやで？」

「だってえ、ギターてなんか軟派な感じせえへん？やっぱ硬派なベースがやりたいで」

「せやったら、ギターベースにすりゃええんとちゃう？あれやったら女の細腕でも弾けるし」

「アカン。アカンわ兄貴。全く分かってへんな」

騒がしい関西弁の二人組は、僕の横を通り過ぎていく。

少しだけ、気分が悪くなってきた。

「モモちゃん、張り切ってますね」

「まあ、学祭も近いしな。やる気になるのはいい事だ」

さらにその後ろにいた、メガネの少女と大男が通り過ぎていく。
やはり、昨日の四人組の様だ。茶髪ウルフにボブ、田舎ヤンキーに
ポニーテール。

「……何なんだ、アイツら？」

誰にでもなく、僕は呟く。

教室は、朝の賑わいを見せていた。

飛び交う声と音。

トランキライザー

僕は僕専用の精神安定剤を取り出し、耳に当てて再生する。

今日は気分的に、シヨパンの『華麗なる大円舞曲』にした。

軽快な音が、僕の身体に浸透していく。

やはり音楽は落ち着く。音を楽しむとは、先人もよく言ったものだ。

世界に満ちた色褪せた雑音とは違い、世界を彩る音楽。

これがなければ、僕はきつと生きていけない。

席に座り、鞆を掛ける。

何気なく窓の外を見ると、先日少女が校門をくぐっている姿
が見えた。

名前も知らない少女は、一人でいた。

当然だ。昨日、少しだけ話して分かった事だが、彼女は常に人を寄
せ付けないオーラを発していた。

まあ、僕には関係のない事だが。

H Rの後、風先生に昨日のサボリについて軽く叱られた僕は、授業に励んでいた。

前にいた学校より学習内容が少し遅れていたので、余裕を持つ事を覚え、僕は斜め前の席に目をやる。

腰まである長い黒髪の少女は、全く微動していない。

真面目に板書している訳ではないらしい。

「(……なあ、オイ。転校生)」

何もせずに惚けていると、隣からシャーペンで肩をつつかれた。

振り向くと、僕の隣の席に座っている男子生徒は、間違いなく今朝の男。

「(転校初日にサボるたあなかなかなやるな。何してたんや?)」

なれなれしい男である。

とは言え、訊ねられたからには答えなくてはいけない。

僕は教師に視線を移し、熱心に黒板に古語を書き込んでいる事を確認し、隣の男に向き直る。

「(気分悪かったから、屋上で休んだ)」

「(屋上? って事はアレか。春日部も一緒やったんちゃう?)」

「(春日部?)」

「(俺の2つ前の席の女。なっがい黒髪が幽霊みたいな)」

このウルフヘッドの話によると、黒髪の少女の名前は春日部かすかべ 奈緒なお と言い、いつも一人で屋上に佇んでいるんだとか。

「(……ってか、今更だけどアンタ誰?)」

「(あ? 自己紹介してへんかったか?)」
してない。

「（俺は轟 祐一。部活は軽音してん）」

「（軽音か……）」

そう言えば、昨日はピックを口にくわえていた気がするし、今朝は妹らしき人物とベースについて話していた。

「（妹とかいる?）」

「（おう。おるで。この一年で李^{すもて}言^いうてな、生意気やけどそこがまた可愛いんや）」

写真見るか、と祐一は定期を出してきたが、僕は丁重に断る。常に写真を持ち歩くとか……どんな妹溺愛主義かと問いたい。そうこうしている内に、授業終了の鐘が鳴る。

「いやあ、終わった終わった。今日も一日ご苦労さんって自ら褒め讃^{たた}えたいわ」

「まだ一限が終わったただけだけどな」

背伸びをする祐一に、僕は呟く。すると祐一が、

「アカン！人のノリツツコミを殺したらアカンで自分！」

何故かキレてきた。

あまりの急事態に呆然とする僕だが、祐一は続ける。

「今ントコは、俺がノリツツコミする筈だったんやで!?それをまアあんな又ルいツツコミで殺されたら、俺は死んでも死にきれへんつちゆうに!」

「いや……死ぬなよ」

「だから殺すな言うとるやんけ!またノリツツコミ潰しやがって!自分、笑いなめとらへん!?そんなんじや登竜門はくぐれへんぞ!」

祐一の叫びに、気付けば周囲が拍手をし始めた。

彼らの目はまるで漫才を見ている客のようで、僕は凄まじく逃げ出したい。

「ええか!?自分にはこれから俺がつきつきりで笑いの何たるかを教えてやる!俺について来いや!」

「……ってか、どうして僕がこんな事態に巻き込まれて」

いや本当に。本気で事態がよく分からない。

困惑しまくる僕に構わず、祐一の暴走は更に拍車かかる。

「見ときいや皆の衆！俺はこれから一ノ瀬を立派な芸人に見せ
るさかい！」

その言葉で、教室中が沸く。事態が大事になっていく。

（何なんだ、コイツは……どうにか話を収めないと……）
と、そこまで考えてふと思う。

（ノリツツコミを潰されただけなのにこの大がかりな展開……待て
よ。

これはボケか？どうでもいい事で盛り上がるというタイプのボケな
のか？）

だとすれば、生半可なツツコミでは抑えきれない。

この場合、『別にお笑い狙ってないし』か？いや、こんな中途半端
ではこのボケを殺してしまう。

また祐一が騒ぎだす。それだけは何とかして避けねばなるまい。

「……て言うか、ボケるなら普通にボケろよ」

「あ、分かってたん？いやあ良かったわ止めてくれて。このまんま
じゃ収集つかんトコやったし」

ニヘラ、と祐一が笑う。何とか事態が鎮まった様だ、僕は胸を撫で
下ろす。

クラスを見渡してみると、笑ってる人とよく分かっていない人が半
々いる。

あそこまで高度なボケならこの結果も仕方ないだろう。

「……っつーか、分かりづらすぎる」

すでに周りの友人達と和気藹々と話し込んでいる祐一は、僕の呟き
を聞いてはいなかった。

四限目も終わり、全校が一斉に昼休みムードに切り替わる。

机を合わせて弁当箱を取り出す生徒、談笑しながら教室を出ていく生徒。

祐一は後者なのか、鞆から財布を取り出して立ち上がる。

「ほな、行こか」

「は？僕？」

「他に誰がおるん？俺、部室で食うんや。一ノ瀬も来いや」

…… 本当になれなれしい奴である。

「いや、僕はいいよ。…… 騒がしいの苦手だから、屋上で食べるよ」
誰も来ない場所という事は昨日確認した。

まあ、若干一名いはしたが、無口な奴だから別に気にならない。うるさくなければそれでいい。

「…… だから、僕は遠慮するよ。部活の人を誘い…… 轟。何だその面は？」

見れば、祐一は顔をひきつらせて身を強ばらせている。

「寒ッ！寒い！何や今の！？澄まし顔で『騒がしいの、苦手だから……』 うつわぁ寒！天然や天然！！」

「…… 何だよそれ。意味分かんないんだけど」

反応の意味も『寒ッ』の意味も全く理解できない僕としては、そろそろコイツのテンションに引く頃かなと心底思う。

「まあそれはともかく、ええやんええやん。たまには騒ぐのも楽しいで」

「だから嫌だつて言ってるだろ！？」

「あ、それともアレか」。『春日部と一緒にご飯食べたいの』って事か」

「違う！」

「こりゃ失敬失敬。ほなら俺は消えたるわ。氣い遣わせてすまんかったなあ」

ケラケラと笑いながら、祐一は去ろうとする。

果たして、奴に誤解を与えたまま野放しにしているのだろうか。一限終了時のクラスを見る限り、奴はかなりのムードメーカーで、かなり人望がある。

しかもやたら軽薄な印象もある。

誤解を広めてそのまま真実にしてしまいそんな風潮すらある。

だが嘘と発覚した時、後でガツカリさせるのは僕になるだろう。

しかも春日部 奈緒はただのとばっちりだ。

……これは何か？転校生イジメって奴か？

僕は祐一の肩を掴み、無理矢理振り返らせる。

「……僕も行く」

そう答えた時に見た、祐一の満面の笑顔が網膜に焼き付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2034a/>

遙かの歌声

2010年10月16日14時43分発行